

一、次の一―部のカタカナを漢字に直しなさい。⑤⑥は送りなをふくめて書きなさい。

- ① 将来性のある会社にトウシする。 ② 天皇ヘイカのお言葉を聞く。  
④ リーダーのサイリヨウで決まる。 ⑤ 海岸でつり糸をタラス。

- ③ ボウサイ訓練を行う。  
⑥ 教訓を心にトメル。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ルールは\*ゲームのメンバーと行為を結び付ける論理的\*拘束力であり、それゆえ特定の誰か(の力)によって行為が強制(または禁止)されるわけではない。ゲームを営むメンバー同士が互いに行為を強制(禁止)する、いわば「①内側からの統制」である。

これに対して\*ペナルティは、それがルールとして制度化されたものであったとしても、自分以外の誰かによって行為を誘導される、

「②外からの統制」であるとみなすことができる。ペナルティの提示によつてゲームの「外側」に置かれてしまった人は、もはやそのゲームのルールを自らのルールとして参照することはなくなつてしまふかもしれないのだ。

以上のように、ルールによる強制とペナルティによる誘導は、まったく異なる仕組みであり、それゆえにペナルティを強調し意識させることは、ルールがルールとして意識される可能性を\*阻害してしまふ、すなわちルールの参照可能性を低下させる恐れがあるのだ。

「しなくてはならない」あるいは「してはならない」ことを、「しないと罰を受ける」「すれば罰を受ける」ことであると解釈してしまう。あるいはそのような解釈をさせてしまふ。そのことによつてルールがルールとしては意識されなくなつてしまふ。そういったことは実際に様々な場面で問題になる。特に、③ルールを提示する(参照する)場面と、ルール違反に対応する場面におけるコミュニケーションは非常にデリケートだ。

例えばあるグループのリーダーが、「集合は八時だから遅刻するなよ。遅刻した者には罰として〇〇をしてもらうからな」と発言したとしよう。この発言はペナルティを具体的に示しているのだ。ペナルティによる誘導を意図しているように受け止められる可能性が高いだろう。もしメンバーがそのように受け止めたのなら、遅刻しそうになつたときに、「④罰である〇〇を覚悟すればそれでいいだろう」と安易に考えて、遅刻を回避する努力を怠るかもしれない。

それゆえ、この発言は「ルールを守らせる」という観点から見ればあまり適切だとは言えないのだが、だからといってこのような発言は常に「してはならない」ことなのかというと、必ずしもそうではない。

もしリーダーの意図が遅刻を完全になくすことにあるのではなく、ある程度まで少なくすればそれで十分であり、むしろ少数の遅刻者が人のいやがる作業を罰として引き受ければ、それはそれで助かると考えているなら、上記の発言はそれなりに合理的だ。そして実際に遅刻者が進んで罰としての作業を行い、全体として効率的な分業が達成されているのなら、何も問題はない。つまり、メンバー全員に確実にルールを守らせようという意図がある場合に限り、その意図が十分に伝わらずにペナルティによる誘導であると受け止められることによる問題が生じるのだ。

⑤このように、ペナルティによる誘導が常に「悪い」わけではない。それを使わなければならぬ状況もあるし、ペナルティによる誘導の方が望ましい状況もあるだろう。なによりそれは実際に用い

られているのだ。だからこそ、ペナルティによる誘導なのかルールによる強制なのかを見分けて使い分ける、両者を明確に区別できるコミュニケーション能力が必要なのだ。

ルールとペナルティを見分け、使い分ける能力は、ルールを守らせようとする側だけが求められているのではない。

先ほどの例において、もしリーダーがルールによる強制を意図し、罰については言及しなかったとしても、それを聞いたメンバーが「リーダーに叱られるのはいやだから遅刻しないようにしよう」と考えたなら、その人には遅刻の禁止が「ルール」であることは伝わっていない。そして、リーダーが怒つてもあまり怖くない人だと⑥高をくくれば、遅刻を回避する努力を怠るかもしれない。⑦こうなつてしまつと、リーダーがいくらルールを守らせようとしてもうまくいかないだろう。

つまり、ルールを守られる側(リーダー以外のメンバー)がルールというものを理解し、具体的なコミュニケーションの中でそれに気づくことがなければ、ルールは機能しないということだ。

「ルールを守られる側がルールを理解していなくてはならない」という表現はやや誤解を招きかねないので、少し補足しておきたい。ルールはゲームを共有する技術であり、そのメンバーが「互いに行為を強制したり禁止したりするためのものなので、基本的に「ルールを守らせる側」と「守られる側」が固定されているわけではない。リーダーがいたとしてもその人もまたルールを守らなければならぬのは当然であるし、他のメンバーがリーダーに対してルールを守るように要求することも、(ルールというものの仕組みの上では)可能だ。そのためより正確に表現するならば、メンバーすべてがルールを理解し、具体的なコミュニケーションの中で⑧それに気づくことができなければならない、と言ひ換えた方が良いだろう。

(佐藤裕の文章による)

注 \*ゲーム——ここでは、複数の人とする、何かひとつのことを「ゲーム」と呼んでいる。

\*拘束——自由を制限すること。

\*ペナルティ——罰則。

\*阻害——さまたげること。

問1 ——①「内側からの統制」と異なるものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア、ゲームのメンバーと行為を結び付ける論理的拘束力  
イ、ゲームを営むメンバー同士が互いに行為を強制(禁止)する  
ウ、ルールによる強制  
エ、「しなくてはならない」あるいは「してはならない」こと  
オ、「しないと罰を受ける」「すれば罰を受ける」こと

問2 ——②「外からの統制」が行われる場合、ゲームのメンバーにどんなことが起きる恐れがあるか、「ルール」という語を使つて二十字～二十五字で答えなさい。

問3 ③「ルールを提示する(参照する)場面と、ルール違反に対応する場面におけるコミュニケーションは非常にデリケートだ」とあるが、具体的にどんな点が「デリケートだ(微妙で細心の注意を必要とする)」というのか、その説明として最適なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、遅刻をしてはならないと決めたグループにおいて、リーダーが遅刻したら罰を与えると言ったとき、メンバーは少数の遅刻者が罰を引き受けることで自分は助かると効率的に考えかねない点。
- イ、遅刻をしてはならないと決めたグループにおいて、リーダーが遅刻したら罰を与えると言ったために、メンバーが意図を理解せず反発し、遅刻を回避する努力を怠るようになりかねない点。
- ウ、遅刻をしてはならないと決めたグループにおいて、リーダーが遅刻したら罰を与えると言ったとき、メンバーが遅刻をなくそうと努めるのではなく、罰を覚悟すればいいと簡単に考えかねない点。
- エ、遅刻をしてはならないと決めたグループにおいて、リーダーが遅刻したら罰を与えると行ったにもかかわらず、メンバーは遅刻の重大性に加えて受ける罰の軽重にまでも気を取られてしまいう点。
- オ、遅刻をしてはならないと決めたグループにおいて、リーダーが遅刻したら罰を与えると言ったとき、本当の意図はリーダーへの忠誠度をはかることにあるとメンバーに見透かされてしまいう点。

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

十二歳のすみれが父母と犬のラブと暮らす東京の家に、一か月の間、母方の祖父が滞在することになった。背が高く上品な祖父は長野で大学教授をしており、三年前に妻に先立たれている。ある日、だれも聞いていないだろうと思っただけすみれが「ひとりになり」と口にしたところ、思いがけず祖父が部屋から出てきた。

おじいちゃまと長く話したのは、それが初めてのことだった。おじいちゃまは私の隣に座り、かりんとうをつまんだ。いつもの通り綺麗な洋服を着ていたけれど、スリッパをはいていない足に五本指の古びた靴下をはいていて、それだけで随分らしく見え

た。

「しんどいですよね、正直。」

おじいちゃまは、私に負けない大きなため息をついた。「娘だし色々気遣ってくれるのは嬉しいんですけど、こうもまっすぐ愛情をぶっつけられたら、すごく疲れるんですよ。私もひとりになりたい。早く長野の家に帰りたいです。」

「そうなの？」

「だってそうでしょう。ここにいと完全なひとりの時間がないし、すみれさんだって気を遣うでしょう。」

「気……そんな、こと。嬉しいよ、おじいちゃまがいてくれて……。」

問4 ④「罰である〇〇」を具体的に示した語句を本文中から八字でぬき出して答えなさい。

問5 ⑤「このように、ペナルティによる誘導が常に『悪い』わけではない」とあるが、どんな場合が「悪い」というのか、「場合。」に続く形で本文中から二十字～三十字でぬき出して答えなさい。

問6 ⑥「高をくくれば」の「高をくくる」の意味として最適なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、どの程度のものなのか予想する。
- イ、たいしたことはないと思える。
- ウ、意のままになるだろうと軽んじる。
- エ、言いなりにならないように身構える。
- オ、形勢を逆転できると思つて反撃する。

問7 ⑦「こうなってしまうと、リーダーがいくらルールを守らせようとしてもうまくいかないだろう」とあるが、うまくいくようにするためにメンバーに必要な力は何か、本文中から二十字前後でぬき出して答えなさい。

問8 ⑧「それに気づくことができなければならぬ」とあるが、これは「ルール」がどんなものであると気づくことか、本文中から五十字以内でさがし、その最初と最後の五字をぬき出して答えなさい。

問9 あなたの身近で「ペナルティによる誘導」が実際に用いられている例をあげ、それがうまく機能しているかどうかを八十字以内で書きなさい。

「いいえ、いいえ、いいんです、無理しなくて。気持ち分かりますから。①すみれさんは、私たちにすごく似ている。」

「私たち？」

「私と、あなたのおばあさんです。」

「おばあちゃま？」

おじいちゃまの話は驚くべきことだった。みんなに好かれて優しい、上品なおばあちゃまは、おじいちゃまとふたりのときは、毒舌家で、ひどい悪態をついて、時々は仲良しの友達の悪口だつて言っていたのだそう。そんなこと、信じられなかった。

「おばあちゃまが？ 信じられない。」

そんなことを言いながら、私はなんだかワクワクしていた。おじいちゃまを見ると、おじいちゃまも、なんだか嬉しそうだった。

「すみれさんも、いい子でいようと思つてるでしょう。でも、疲れますよね。私もそう。娘にすら疲れるんです。あの子には、私たちの良いところしか見せて来なかったから、それはそれは心根の優しい、いい子に育ってしまった。だからあんな風に愛情を隠さない。まっすぐでしょう。それがねえ、ちよつとしんどいですよねえ。」

私は思わず、吹きだしてしまった。

「しんどいつて、おじいちゃま、ママは実の娘でしょ？ 娘ってかわいものなんじゃないの？」

「これは正直に言いますとね、娘だからって無条件にかわいいなんてことないですよ。」

「ええ！」

「みんなどうしてあんなに自然に、自動的に家族の愛を信じられるんだろう。ばあさんも言っていました、子どもが生まれたらただちに母性が発動するわけじゃないって。みんなそういうものだから、という押しつけがあるからそうふるまっているだけですよ。正直ね、私、すみれさんのことも、孫だからって自動的にかわいいと思えないんですよ、申し訳ないですけどね。」

その頃には私は、本格的に爆笑していた。

「孫なんて、『A』の中に入れても痛くないんじゃないの？」

「痛いでしょうよ、入れたくないですよ！」

おじいちゃまのことは好きだった、はずだ。でも、今のおじいちゃまの方が、私はうんと好きだった。そしてきつと、②のおじいちゃまの姿をママに見せてはいけないのだということも分かっていた。だからおじいちゃまとは私は、協定を取り結んだ。

「係だと思いましよう。」

「係？」

「そうです。すみれさんは、孫係。わたしは、爺係。この一月、それぞれ、係をきちんとつとめあげませんか。私の娘のために。すみれさんのお父さんのために。」

そのアイデアは、私にとつてもものすごく素敵なことに思えた。私たちふたりは、悪い秘密を共有したギャングみたいな気持ちだった。

「係だと思ったら、なんだって出来るんです。」

その日から、私とおじいちゃまはそれぞれの係を忠実に、立派にこなすようになった。夕飯の席で仲良くおしゃべりし、ふたりでラブをかわいがり、とにかく家の中では常に一緒にいた。ママが涙を浮かべるほどその風景を喜んでくれるので、だから私たちはますます係の任務をがんばった。夕方にはふたりでラブの散歩に行つて（それももちろんママを狂喜させた）、それぞれ一日分の悪態をついた。そして帰宅すると、またふたりでさわやかなおしゃべりに興じるのだ。私たちの目覚ましい親密ぶりに、パパも驚いていたし、喜んでいた。私たちは本当にうまくやっていた。

休日になると、私はおじいちゃまが学会で通っている大学に連れて行つてもらった。

大学には休みなのに人がたくさんいた。チャリダーが笑顔で練習をしていて、道端でお酒を飲んでいる人たちがいて、講堂前では映画研究会の人たちが8ミリフィルムを回していた。

「見てください、すみれさん。」

おじいちゃまは、いつものお洒落なお洋服を着て、ステッキを持っていた。道行く生徒に挨拶されると、それはそれは素敵な笑顔で返事を返し、③のたび私は「嘘つけ！」と笑い出しそうになった（もちろん私も、素敵な笑顔で挨拶をした。私たちは「素敵な教授とお孫さん」を完璧にこなしたのだ）。

「チャリダーは異様に元気で、昼から飲む人はとんでもないばか騒ぎをして、映画研究会の人はしゃらくさい話し方をする。もちろん、元々その気質を持った人間もいます。でも、大抵は徐々にその場に合った自分らしくなってゆくんです。」

おじいちゃまの話は、とても面白かった。

「私たちの体のすべてが私たちの意志で動くわけではないんですよ。何か大きなものに動かされているんだ。それを社会と言うのかもしれないがね。とにかく、ゆだねられるところはゆだねましょう。私たちは、この世界で役割を与えられた係なんだ。」

そして、④私をととても楽にしてくれた。

学校でも、私は係をきちんとこなせるようになった。さくらちゃんのことをうつつとうしいと思う瞬間、「さくらちゃんの優しいお友達」をきちんとやろうと思ったら本当に優しくなれたし、先生の前では「優秀なすみれちゃん」をこなすことが出来た。褒められたら「係をきちんとこなしたこと」を褒められているのだと思つて、素直に喜ぶことが出来た。

そしてそうやっていても、帰ったらおじいちゃまの前で悪態がつけると思つたら、ものすごくわくわくするのだった。最初はそれって最悪、ものすごく性格悪いよな私、そう思っていたのだけど、おじいちゃまと話して、そう思わずにすむようになったのだ。

「人はそれを陰口だとか卑怯だとか言うかもしれない。性格が悪いとか。」

「うん、私もそう思う。だから自分のことが嫌になるの。」

「でもね、すみれさん。すみれさんがそうふるまうのは、さくらさんを傷つけないからでしょう？先生の期待に応えたいからでしょう？」

「うん、そうだね。そう。」

「じゃあそれは思いやりの心からくるんです。」

「思いやり？」

「そうです。それは誰かを騙しているのとは違う。騙して、それで得をしようとしているのではないのだから。ここが大切です。つまり、得をしようと思つて係につくのはいけません。あくまで思いやりの範囲でやるんです。その人が間違っていると思つたら、そしてそれを言うことがその人のためになるのだったら言わなければいけないし、相手を傷つける覚悟をもって\*対峙しなければいけない。でも、その人が間違っていないとき、ただ性格が合わないだけだとか、その人の役割的にそうせざるを得ないんだなあと分かるときは、その人の望む自分での努力をするんです。」

「難しいけど、分かる気がするよ。」

「すべて分からなくていい、とにかく⑤すみれさんがいい子でいようとするのは、とてもえらいことなんです。それは涙ぐましい努力だし、いい子のふりではなく、本当にいい子だから出来ることなんです。」

「褒められてるんだね、私。」

私は自分のことがずっと嫌だった。みんなの前でいい子のふり（だと思つていた）をして、みんなのことをガキっぽいと思つたり、さくらちゃんのことをうつつとうしいなあと思つたり、おじいちゃまが家にいることもしんどいと思つている、そんな自分は卑怯で、悪い子なんだと思つていた。でもおじいちゃまは、そんな私を「本当にいい子だから」と、そう言ってくれるのだ。

「だつてもしすみれさんに、おじいちゃまが家にいるのすごくしんどい、いつ帰るの、なんて『B』と向かつて言われたら、さすがの私も泣いてしまいますよ。根はいい子なんていうのも納得出来ない。みんな根はいい子なんだ。それをどれだけ態度に表せられるかですよ。」

私は吹き出した。おじいちゃまにかかると、私はいつまでだってこうして笑つていられるのだった。

「そういえば私、パパが納豆食べるとこ見たらキモイの。でも言わないでいる。」

「でしょう？すみれさんはいい子なんです。」

【D】ことは別なんだ。」

【C】ことと

パパもママも、こうやって一緒に歩いているラブだって、まさか私とおじいちゃまが散歩しながらこんな話をしているなんて思わないだろう。もしそれを知ったら悲しむだろうか？ ううん、驚きはするけれど、悲しまない気がする。でも、絶対に言わない。ママのために。

「そしてね、すみれさん。悪態をつくのは限られた人にだけ、本当に信じられる人にだけです。インターネットに書きこむなんてもつての他、それは本当に卑怯なことですよ。とにかく本人の目に触れる、耳に入る可能性があることは絶対にするべきではない。」

「そうする。私、おじいちゃまだけにする。」

「ばあさんも、私以外には一切悪態をつかなかった。みんなを思いやって、みんなが望むことを全力でやって、そして疲れたら私だけにそつと悪態をつく。絶対に誰にも漏らさなかつたし、だからそれによつて誰かを傷つけることは絶対になかつた。」

「素敵だね、おばあちゃま。」

「素敵ではないです。素敵ではない。でも私は大好きでした。」

おじいちゃまの言葉を、私は心から信じる事が出来た。ふたりで「素敵な夫婦」として完璧にふるまって、疲れたら悪態をつき合うなんて、最高のパートナーだ。そして、そんなことが出来る人と巡り会えるなんて、それはまさに奇跡だ。

「おばあちゃまがいなくなつて寂しい？」

「寂しいです。すごく、すごく。」

淡々と暮らしているように見えたおじいちゃまは、ずっと寂しかったのだ。その寂しさを自分のものだけにして、誰にも言わず、こうやって生きてきたのだ。

「寂しいです。」

おじいちゃまは、あと一週間で帰ることになっている。私も寂しかった。ものすごく寂しかった。⑥「一カ月前の自分を思うと、この気持ち信じられなかつた。」

(西加奈子の文章による)

注 \*対峙——向き合つて立つこと。

問1 —— ①「すみれさんは、私たちにすごく似ている」とあるが、

どんなところが似ているか、二十字以内で答えなさい。

問2 —— ②「このおじいちゃまの姿をママに見せてはいけないのだ」ということも分かっていた」とあるが、これは「ママ」がどんな人物だからか、本文中の語句を利用して三十字以内で答えなさい。

問3 —— ③「そのたび私は『嘘つけ！』と笑い出しそうになつた」とあるが、「おじいちゃま」のどんなところが「嘘」なのか、その説明として最適なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア、大学の生徒たちに対する、異様に元気だとかひどいばか騒ぎをしているとか小生意気な話し方をするとかいう印象を、それとなくほめかしながら笑顔で挨拶を返しているところ。

イ、自分に挨拶をする生徒たちの元気でにぎやかな様子を、内心うらやましく感じているため、お洒落な洋服やステッキを見せることで若い人たちよりも優位に立とうとしているところ。

ウ、その場に合つた自分らしさを演じている生徒たちに、たいして親しみを感じているはずもないのに、元気に挨拶をされると素敵に見える笑顔をつくつて返事をしていているところ。

エ、いつものお洒落な洋服とステッキを身につけ、道行く生徒たちに挨拶されるたびに笑顔をふりまくことによつて、自分が素敵な教授であることを意識させようとしているところ。

オ、挨拶をしてくれたことに笑顔を見せてはいるけれど、心の中では生徒たちが休みだからと異様に元気になって遊んだり騒ぎ立てたりしていることを苦々しく思っているところ。

問4 —— ④「私をとんでも楽にしてくれた」とあるが、その理由として最適なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア、それまですみれは本心と違う言動をする自分を性格が悪いと思つて嫌だったが、おじいちゃまの言葉によつて、それを相手の期待に応えるために与えられた役割だと思えるようになったから。

イ、それまですみれは自分の体が自分の意志で動くと思つていたが、おじいちゃまの言葉によつて、体は社会という大きなものにゆだねられていて自分ではどうしようもできないとわかつたから。

ウ、それまですみれはその場に合わせた言動ばかりしている自分のことがきらいだったが、おじいちゃまの言葉によつて、自分の気持ちに合わないことは人にまかせていいのだと知つて安心したから。

エ、それまですみれは自分の気持ちをいつわつてまで人に優しくすることに苦しんでいたが、おじいちゃまの言葉によつて、それも社会に生きる自分に与えられた義務だと納得できるようになつたから。

オ、それまですみれは気持ちにそぐわなくても得をするようにふるまう自分が許せなかつたが、おじいちゃまの言葉によつて、それも社会で生きていく手段として受け入れられるようになったから。

問5 —— ⑤「すみれさんがいい子でいようとすることは、とてもえらいことなんです」とあるが、なぜ「えらい」のか、その理由を本文中の語句を利用して三十字以内で答えなさい。

問6 —— ⑥「一カ月前の自分を思うと、この気持ちが信じられなかつた」とあるが、これは「すみれ」と「おじいちゃま」がどんな関係になつたからか、「関係」に続く形で本文中の語句を利用して三十字以内で答えなさい。

問7 —— 【A】の中に入れても痛くない、「【B】と向かつて言われたら」の空らんに入る語を、人間の体の一部を表す漢字一字でそれぞれ答えなさい。

問8 —— 【C】ことと【D】ことは別なんだ」の空らんに入る語として最適なものを、次のア～シのうちからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア、優しい イ、悲しい ウ、えらい エ、寂しい  
オ、嬉しい カ、頼もしい キ、卑怯な ク、大切な  
ケ、素敵な コ、正直な サ、親密な シ、綺麗な

問9 「おじいちゃま」や「すみれ」のように「係」をこなすことについて、あなたはどう思いますか。「自分もそうしたい」または「自分はそうしたくない」のどちらかの立場で、その理由とともに自分の考えを八十字以内で書きなさい。

